

月刊 インド



Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人 日印協会 (日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 106 年)



〈ディワリフェスタ西葛西 開会式より〉

目次

- 1. ボースの遺骨を守って P. 3
- 2. 在日インド人社会の発展に貢献して 30 年 P. 6
- 3. インドニュース P. 10
- 4. イベント紹介 P. 16
- 5. 新刊書紹介 P. 18
- 6. 掲示板 P. 19

1. ボースの遺骨を守って Where to be enshrined, the ashes of Subhas Chandra Bose?

産経新聞外信部次長 藤本欣也(当協会個人会員)

インドの独立運動家、スバス・チャンドラ・ボースの遺骨が日本にある、ということを知る日本人は少なくなった。そもそも、「ボースって誰?」という世の中でもある。しかし、これを歴史の秘話にしてしまってはならない、と思う。毎年、首脳会談が行われるほど日印関係が良好な今こそ、戦後未解決の問題の決着を図るべきではないのか。

そんな考えもあって、産経新聞紙上で「ボースの遺骨を守って もう一つの日印交流」(9月14日～11月2日＝毎月曜朝刊に掲載 計8回＝産経新聞 ホームページ <http://sankei.jp.msn.com/>でも公開中)を連載した。

私がボースに関心を抱くようになったのは、シンガポール支局長時代の2005(平成17)年である。たびたびインドに出張する中で、非暴力・不服従運動を主唱するマハトマ・ガンジーとたもとを分かち、武装闘争を追求したボースに対する、インド社会における微妙な評価の揺れを感じた。一方で、「ボースの飛行機事故死は偽装工作。極秘にソ連に渡って反英闘争を続けた」と信じ込んでいる国民や政治勢力が少なからず存在することも知った。

事故の生存者が残した記録によると、ボースの最期は以下のようなものである。

1945(昭和20)年8月18日午後2時ごろ、搭乗機が台北(台湾)の飛行場を離陸した直後にエンジントラブルを引き起こして墜落。大やけどを負ったボースは同日夜、台北の病院で48歳の生涯を閉じた。

ボースは現在のオリッサ州出身。ガンジーの反英闘争に参加し、推進母体のインド国民会議派の議長を務めた。第2次大戦勃発後、ドイツに渡り、ヒトラーと会談。日本が米英と開戦すると、潜水艦を乗り継いで日本へ。自由インド仮政府主席、インド国民軍最高司令官として日本のインパール作戦にも従軍した。

遺体は台北で火葬された後、遺骨を納めた木箱が極秘裏に日本に移送され、大本営から、東京在住のインド人、ラマ・ムルティ氏らに渡された。ムルティ氏はボースが総裁を務めたインド独立連盟の東京代表の地位にあった。

ときに、連合国軍最高司令官のマッカーサーが日本にやって来て間もないころで、占領行政の行方を日本国民が固唾をのんで見守っていた。日本軍部と関係の深かったボースの葬儀を引き受けてくれるところがなかなか見つからなかったのは、無理もなかったかもしれない。

そんな中で、「靈魂には国境はないのみならず、死者に回向することは仏法に従事する僧侶の使命だ」と葬儀を快諾したのが、蓮光寺(東京都杉並区)の望月教栄住職(当時)だった。

ボースの葬儀は同年9月18日夜8時、蓮光寺でひっそりで行われた。式終了後、教栄住職はムルティ氏から「遺骨を(そのまま)預かっていたきたい」と申し入れを受けたという。

それから64年一。本堂にはいまなお、ボースの遺骨が安置されている。

□ □

蓮光寺は今年も、ボースの命日の8月18日に法要を営んだ。

去年、シンガポールから帰国した私はこのボースの慰霊祭に初めて出席した。参列者は50人ほど。高齢者が多く、インド人出席者はわずか5人だった。

蓮光寺には過去、インドの首脳が数多く訪れている。1957(昭和32)年のネール首相、翌年のプラサド大統領、1969(昭和44)年のインディラ・ガンジー首相、2001(平成13)年のバジパイ首相ら。それぞれ色紙に一筆をしたため、寺に保管されている。

プラサド大統領 「蓮光寺にお参りしてネタジ(指導者の意、ボースの尊称)の聖なる遺骨にお祈りをささげる…」

バジパイ首相 「インドの偉大な自由の闘士、ネタジ、スバス・チャンドラ・ボースの霊を安置し

ている蓮光寺を再訪できてうれしく思います」

これに対し、ネール首相が記したのは「ブッダの教えが人類に平和をもたらしますように」。実にあっさりとしている。こうした場合、少なくともボースの功績や人となりについて記するのが普通だろう。ネールは、ボースに触れるのを避けたとしか思えない。12年後、首相として来日した長女のインディラ・ガンジー氏も父親に合わせているかのようである。

「ブッダの光が真心と平和に向かって人々のために永久に私たちを導かれんことを」

ボースは 1938(昭和 13)年、国民会議派の議長の座をネールから奪取するなど、両者はライバル関係にあった。

戦後、ネールはかつての政敵への複雑な感情を引きずっている。インドのボース研究家、タパン・バネジー氏によると、ネールは 10 年以上にわたり、ボースの話題を一切口にせず、ラジオもボースについて極力放送しないよう指導されていたというのである。

こうした思いは子孫にも引き継がれていたのかもしれない。戦後、「ネール・ガンジー王朝」と揶揄されるほどネール一族が首相の座を占めたインドにおいて、ボースの遺骨を引き取るような雰囲気は醸成されることはなかった。

「義経伝説、ならぬ「ボース伝説」の信奉者たちにとって、蓮光寺に安置されたボースの遺骨は、決してあってはならないものである。終戦直後、インド人らによる強奪を恐れて、ボースの骨箱を抱いて眠ったこともあるという教栄氏。そして父親の遺志を受け継ぎ、遺骨の帰国に向けて力を尽くした日康前住職。インドの政治に翻弄され、望みをかなえることができなかった父子 2 代の無念を思う。

□ □

取材の過程で、新たな事実も分かった。

「蓮光寺以外にもボースの遺骨があるらしい」という話を聞きつけ、取材を進めた結果、確かに存在することが判明した。正確に言えば、かつては存在したが、すでに 3 年前にインドに返還されていた。事故死から 61 年後にようやく、英雄ボースの遺骨が故国に戻ったのである。

別の遺骨を保管していたのは、大本営から遺骨を預かったラマ・ムルティ氏だった。占領軍による没収を恐れた彼は遺骨の分散を決め、蓮光寺に預ける前にひそかに分骨し、自宅で保管していたのだ。彼がインドに帰国した後は、日本人女性と結婚して日本で暮らす実弟、ジャヤ・ムルティ氏に託した。

戦後、慰霊祭などを通じて蓮光寺に安置された遺骨の方に光が当たる中、「もう 1 つの遺骨」を人知れず保管してきたムルティ家。インド料理店を営んでいたジャヤ・ムルティ氏が 1974(昭和 49)年に亡くなった後は、妻の淳子(あつこ)さんが約 30 年間、自宅でボースの遺骨を保管し続けてきたという。そして 2006(平成 18)年、ボースの兄の孫に当たるスガタ・ボース米ハーバード大教授に遺骨を返還、同年、遺骨は教授とともに地元のコルカタ(旧カルカッタ)に戻ったのである。

現在 85 歳の淳子さんに、遺骨の返還を決意した理由を聞くと、しばし間を置いてこんな答えが返ってきた。

「私が死んだ後、遺骨はどうなるのだろう。そのことが心配で仕方がなかったから…。ああ、ここにもボースの遺骨を懸命に守ってきた人がいたと実感した。

× ×

日本とインドの戦後は、「ボースの遺骨」から始まったとっていい。その意味では、ボースの一部の遺骨が非公式にインドに戻ったとしても、蓮光寺の遺骨問題が処理されない限り、「戦後」は終わらないのだ。



〈ボースの遺骨が納められている
金色の宝塔〉

やれ、「価値観外交だ」「同じ民主主義国家だ」などと、日印関係の重要性を唱える政治家の掛け声は威勢が良い。いちいちもつともではあるが、それだけでは国民に響かない。目に見えず、実感がわかないのである。ならば、蓮光寺の遺骨問題の早期決着を図り、何らかの形で「ボースの遺骨」を日印交流のひとつのシンボルにできないだろうか。

今年5月に亡くなった前住職の日康氏は2004(平成16)年に、将来的には蓮光寺でボースの遺骨を分骨し供養を続けたいという意向をインド大使館側に表明。さらにその翌年には、インドにあるボースの銅像に、遺骨を戦後60年間守ってきた父と自分の名前を刻んでもらいたいとの要望を示している。

今回の取材では、1903(明治36)年に発足した日印協会のこれまでの『会報』や『月刊インド』が非常に参考になった。1914(大正3)年の会報に日印協会の設立趣旨をつづった文章がある。

「…歴史上より見れば、宗教学術等に於いて、日本の文明は印度の文明に負ふ所甚だ大なり。更に之を當今の経済上より見れば、通商貿易等の事に於いて、日印両地の互に相扶掖すべきもの極めて多し。斯くの如き歴史上の因縁を有し、斯くの如き経済上の関係を有しながら、此の東洋の諸邦が未だ十分に親善すること能はざるは何ぞや」

上記の「印度」には蘭領インドや仏領インドシナなども含まれているが、主要地域はあくまでもインド亜大陸である。およそ1世紀も前の設立趣旨なのに、ちっとも古さを感じない。つまり、日印関係のあり様がまったく変わっていないことに啞然とするのだ。

このままでは100年後も同じことが起きかねない。 (了)

【 チャンドラ・ボースの遺骨と蓮光寺の関連年表 】

1945(昭和20)年	8月	ボース、台北で飛行機事故死
	9月	蓮光寺でボースの葬儀挙行
1957(昭和32)年	10月	ネール首相、蓮光寺を訪問
1969(昭和44)年	6月	インディラ・ガンジー首相、蓮光寺を訪問
1979(昭和54)年	6月	望月教栄住職逝去
1990(平成2)年	8月	蓮光寺境内にボースの胸像完成
1994(平成6)年	8月	蓮光寺で50回忌慰霊祭。約100人が参列
2001(平成13)年	12月	バジパイ首相、蓮光寺を訪問
2006(平成18)年	3月	ボースの一部遺骨がインド(コルカタ)に帰国
2009(平成21)年	5月	望月日康住職逝去

藤本 欣也 (ふじもと・きんや) 氏 略歴

1963年 大阪府茨木市生まれ。早大文学部を卒業。1988年 韓国・延世大に語学留学。
1990年 産経新聞社入社。社会部、外信部勤務を経て1998年から2001年まで香港支局長。
2001年から03年までブリュッセル支局長。イラク、北朝鮮取材を経て
2004年から08年までシンガポール支局長。北京五輪を取材後、帰国。
2008年9月から外信部次長。

2. 在日インド人社会の発展に貢献して 30 年 Japan and India ~Little India - Indian Community of Edogawa (ICE)~



〈筆者紹介〉

ジャグモハン スワミダス チャンドラニ さん

1952年 インドのコルカタ生れ

1978年 (デリー大学卒業後)市場調査のため初来日

1979年 東京都江戸川区の西葛西に居住

1981年 当地でジャパンビジネスサービス(有)を設立
代表取締役就任

現在、インドの紅茶や食品の輸入ビジネス、インドレストラン経営等を手がける傍ら、“江戸川インド人会”会長として在日インド人への支援や日本人とインド人との草の根交流の促進に努める。

〈Jagmohan S Chandrani 氏〉 当協会個人会員

It is with a sense of trepidation, wonder and honour, that I find myself writing this article. I am informed that this is the first time in the 105 years of history of the Japan - India Association monthly newsletter that a person of Indian origin has been asked to write an article in it.

I should start with a small introduction of myself. It has been thirty-one years since I arrived in Japan. It was the year 1978, in the first week of the month of April. The next day was a bright and sunny day, my first morning in Tokyo, Japan. The city was a sight to see, filled with cheery-blossoms “Sakura” trees in full bloom. It was for the first time that I had seen so many “sakura” flowers in one place. I was totally astonished and instantly enamored.

During those days, there was not much information about Japan in India. Most of what was known was either through text books or through beautiful pictures in the calendars of Japan Airlines and the diaries sent by Japanese companies showing the cultural life of Japan- the tea ceremony, the calligraphy, the kimono-clad ladies and the beautiful scenes of nature and temples.

On my part, I came to stay in Nishi Kasai because of the proximity to the warehouse I had rented and the truck terminal at Rinkaicho for my import business. When I first came here, there was no Nishi Kasai station on the Tozai line of Tokyo Metro. My office was located in Iidabashi and I would come to Kasai station and take a bus to the warehouse. Most of the area around Nishi Kasai station was empty land and the land which became later Sei Shin-cho was still un-reclaimed..

During those days, there were not many Indians living in Japan, maybe two thousand in Tokyo and about another three thousand in the rest of Japan. All this changed in the year 2000. It was in 2000, that the visit of Prime Minister Mori to India changed a paradigm of Japan-India relations which had suffered heavily because of India’s nuclear tests in May, 1998. PM. Mr. Mori and PM. Shri Atari B. Vajpayee agreed to establish the “Global Partnership ” between Japan and India. Under this agreement, the Government of Japan began to ease conditions for granting visas to Indian IT engineers to come and work in Japan. It was the first time in the history of modern Japan that such a large number of Indians were issued visas to work in Japan. With the opening of the IT sector to Indian

industry, the Japanese companies began to make business tie-ups with Indian companies for the provision of ICT services in Japan. This brought about an unprecedented situation in which suddenly a substantial number of young Indians came to work and live in Japan. It was something for which neither the incoming Indians nor the Japanese were prepared for.

In the year 2000, I began seeing a number of new Indian faces in the vicinity of Nishi Kasai. Up to that time, there were only four Indian families living here and they all knew each other very well. This was a very new phenomenon for all of us. Upon greeting them, I got to know that they had come to Japan to work in some IT related projects and had come to Nishi Kasai to find a house for themselves to live in. As a matter of fact, a large number of Indian IT engineers being called by the financial services houses, the work place for the Indian IT engineer was typically, Otemachi, Kayabacho, Kamiyacho, Toranomom, etc. Hence, Nishi Kasai was a very convenient location for them to stay, as the commuting time between Nishi Kasai and Otemachi was only seventeen minutes. However, they were facing a lot of difficulty as, in most cases, local building owners were not agreeing to rent them house premises. House brokers would show the Indians a house and inform the rent. When the Indian agreed to the terms and conditions and the broker would then contact the landlord that a person of Indian origin was going to rent the house, these brokers were told that the house would not be rented to an Indian.

The same story was repeatedly told to us within a period of six months. Hence, in the month of July, 2009, the long time residents of Nishi Kasai felt that it may be a good idea to try and get all the Indians to meet each other. So by word of mouth, we began to contact the Indians we met in the street and informed them that we were planning such a meet in August and that we would like them to attend. Not only that, we requested them to inform their friends who were living here in Nishi Kasai area. On a Sunday, in August, 2000, we all met at the Japanese Tea House in the Gyosen Park in Kita Kasai. We found that we were more than thirty. It was a big surprise for us. We could not believe it. However, it was also a very good feeling to see so many of our fellow countrymen who were living in the same place here in Tokyo, Japan.

Except for four old families, all were recent arrivals. After the introductions were over, the topic soon turned to the difficulties the new arrivals were facing while staying in Japan. Upon hearing this, it was felt that an organization to support the Indians who were living in Japan would be a useful entity. That day we all decided to put together a voluntary organization for the purpose of supporting the lives of Indians and it was named - The Indian Community of Edogawa (ICE) since the meeting had taken place in Edogawa and most of the visitors were living in Nishi Kasai, which is located in Edogawa Ward of Tokyo.

With this began the voluntary efforts to help the Indians coming to Tokyo for work. In the initial stages, there existed two major difficulties faced by almost all newly arriving Indians. One was the difficulty of renting houses and the second, non-availability of Indian food, particularly vegetarian Indian food at reasonable prices in the locality. Most of the new arrivals were young IT engineers who were typically singles and those who were married felt that they would bring their families only when they had found suitable housing. Since, most of the newly arrived Indians were living in hotels and “weekly mansions” , it became imperative that some arrangement had to

be made for provision of Indian food, including vegetarian food acceptable to the Indians in taste, quality and price.

I was fortunate that I could locate a place suitable for preparing and serving Indian food. It was a Japanese “ko-ryoriya” which had closed operations recently. It was about three minutes from the Nishi Kasai station on the north side. As the idea was to prepare a facility of serving of food to Indians, it was sufficient that the food be prepared in the evening as the IT engineers would be away to work during the day time. In other words, it was to be a “mess” for the Indians who lived near Nishi Kasai. Similarly, the taste of the food had to be authentic to the satisfaction of the Indians and not too rich as these IT engineers came to eat it almost every night. I took up this place and appointed two cooks who would prepare the food every evening and the IT engineers would come and eat there. The rate was kept very reasonable also.

That was comparatively the easier part. As most IT engineers and their companies were finding their living in the hotels very expensive and lonely, they wanted to rent an apartment and live there. As mentioned earlier, as most Japanese building owners, in Nishi Kasai area and their agents did not have any past experience of dealing with Indian tenants, they were unwilling to rent out the apartments to Indians as they did not understand the situation of the Indians. Most felt that the Indians had come as “de kasegi” migrant workers to Japan to earn more wages and it was very difficult for the building owners to accept that the Indians would be able to pay the rent of more than one hundred thousand yen regularly, or maintain the garbage disposal rules, or there was a fear that after one person rented the house he would call a number of friends to come and live with him and pay a part of the rent.

It took me some time to get the housing agents to understand that the engineers from India were highly paid, all employed by big concerns and that they were not migrant workers. Initially I had to take the bank pass book of the Indian IT engineer to show to the agent the pay this person was drawing to convince them that the IT engineers had the capacity to pay rent. I requested these agents to try and explain and convince the building owners that by renting to Indians these house owners would not face any loss. In a few days time, one of the local housing agents called me and said that one of the local building owners had agreed to consider the proposal of renting the house to an Indian person. However, other than the financial part, which is “shiki-kin and rei-kin”, he would require a guarantor! This is something which was not going to be easy. As the Indian IT engineer had come to work in a Japanese company from India, most of the companies which sent them did not have any office in Japan. These engineers also could not ask their Japanese clients to become guarantors and as they were new to Japan, they knew no one else! The end result was that since I was making the request to the building owner, the housing agent asked me to become a guarantor! This was something I had not thought about. As a matter of fact, the persons I was trying to help were basically all new to me and I did not know them. However, the situation was such that it would be very odd for me to request a Japanese house owner to take the “risk” of renting to an Indian person without me taking any responsibility. Under the circumstances, there was no other way but for me to become a guarantor. One by one the building owners became convinced that renting the house to an Indian person was not all that bad! In this way we began to find some solutions in Nishi Kasai for the newly arriving Indians.

Once this process got underway, more and more Indians began to look for houses in Nishi Kasai and the population began to grow. With this growth came other needs - need for short-term housing, need for education for small children, need for celebrating festivals so that they did not feel too home-sick, need for entertainment, etc. One by one, the community and its members tried to fulfill these needs.

To meet the needs of short-term visitors, I opened a guest-house in Nishi Kasai, with twenty six-tatami rooms, furnished with a bed with mattress, TV, video, table, chair, AC, high-speed internet connection, etc. and a common room for the residents to get together and chit-chat or play card games etc. a kitchen to cook their own food, and a number of fridges, some only for vegetarian food.

A kindergarten was opened to teach children of the age group one year six months to five years. The medium of instruction was English. This became the predecessor to the International Indian schools at Morishita and Mizue, where now more than four hundred students are studying. The curriculum followed in both of these schools is same as what is done in India, so that the children who study there can go and join a school anywhere in India when their parents return.

For the festivals, the community decided to hold the two major harvest festivals of India, Holi in spring and Diwali in autumn. For the last two years the Diwali is celebrated in a public park in Nishi Kasai and we are very fortunate that not only the resident Indians take part in them, but also Japanese residents have very kindly shown interest in Indian culture and have graced our events. In the area of entertainment, the members of the Indian community have formed cricket teams and have gone to play matches with other cricket teams located in Shizuoka, Yokohama etc. For one month, Indian films were shown every day, evening show, at a cinema hall in Edogawa, in August 2009. For the first fortnight it, was "Don" starring Shah Rukh Khan and for the second fortnight, it was "From Chandni Chowk to China" in which Akshay Kumar had the leading role. Of course, for daily life, arrangements have been made for TV programs to be shown live from India twenty-four hours a day over broadband internet. More than thirty channels are covered. This helps the ladies to feel at home and ensures that they do not feel that they are missing their life style in India. The news channels provide the resident Indians with latest news without any time lag.

One of the important needs which have not been met yet, is the need for a Community Center at Nishi Kasai which could be used for meeting purposes when guests come from home country, of holding of birthday parties and other gatherings, holding of events like naming ceremony of newly born children, different local festivals of India etc. On days when there are no events, it could be like a club and provide facilities for indoor games and activities popular in India and among Indians, like carom-boards, table-tennis, darts, and also provide space to hold yoga lessons, Indian dance lessons, Indian music and singing classes, cooking classes, sari classes, to name some of them.

I would like to conclude with the hope and prayer that together with the cooperation of the Indian residents of Nishi Kasai and the support and understanding of our Japanese hosts, the above need, too, would be fulfilled. I look forward to the understanding and support of the members of the venerated Japan India Association of which the chairman is no other person than former PM. Yoshiro Mori to achieve these goals of betterment of the conditions for Indians during their stay in Japan and for the growth of India-Japan friendship, fraternity and economic ties.

Namaste!

3. インドニュース 10月

News from India

1. 内政

10月1日

- 英字各紙は、パキスタンにおいてラシュカル・エ・トイバ(LeT)がムンバイ・テロ後も勢力を拡大しており、インドを標的としたテロを起こす決意がある旨報道。
- ビハール州カガリア県で、子供を含む村人 16 名が極左過激派グループ(ナクサライト)とみられる勢力に射殺される。

10月3日

- シン首相は、州議会選挙における कांग्रेस 党集会に出席するため、アルナーチャル・プラデーシュ州を訪問。

メモ：

シン首相のアルナーチャル・プラデーシュ州訪問については、中国の馬朝旭報道官が、インドの指導者が中国の重大な関心を顧みず中印領土係争地域へ行った行為に対し強い不満を表明する旨の談話を発表。これに対しインド外務省は、同州はインドの不可分の一部であり、当該国の指導者が選挙の祭に各州を訪問することはインドの民主システムにおいて十分確立された慣行であり、中国の報道官の声明は、国境問題に関する交渉プロセスに資するものではなく、我々はこれに対し落胆と懸念を表明する旨の報道官声明を発出。

10月4日

- アッサム州ソニトプール(州の中心都市グワハティより東に 400km)で、分離独立主義過激派であるボドランド民族民主戦線の一部による銃の乱射事件があり、地元住民 11 名が死亡。

10月5日

- 印国内各紙は、9 月末から降り続いた豪雨により、カルナータカ州で死者 168 人(避難者 30 万人)、アーンドラ・プラデーシュ州で死者 37 人(避難者 45 万人)に上っている旨報道。

10月6日

- ジャールカンド州の州都ランチャーから 20~30km 離れた国道上で、極左過激派グループ(ナクサライト)によると見られる、首を切断された警察官の死体が発見される。

10月7日

- 7 日付各紙は、パキスタン統合情報局 (ISI) は、投降したタリバン兵に対し、刑務所に行くかインドとのジハードに参加するかを選択肢を迫っている旨報道。

10月8日

- マハラシュトラ州東部ガドチロリ県ラヘリ地区(マハラシュトラ州とチャティスガール州の州境から約 18km 地点)で、極左過激派グループ(ナクサライト)による警察部隊襲撃事件が発生し、警察官 18 名が殺害される。

10月9日

- シン首相はアーンドラ・プラデーシュ州の洪水地域を視察。

10月13日

- マハラシュトラ州、ハリヤナ州、アルナーチャル・プラデーシュ州で州議会選挙が実施され、いずれの州においても कांग्रेस 党が第 1 党に。

10月16日

- ゴア州マルガオ市で爆弾事件が発生し 2 名が死亡。

10月20日

- 西ベンガル州西部の西ミドナプル県で、極左過激派グループ(ナクサライト)が警察署を襲撃し、警官 2 名を殺害し、警察署長を拉致する事件が発生。

10月21日

- ウッタル・プラデーシュ州で列車の衝突事故が発生、少なくとも 22 人が死亡し、26 人が負傷。

- バンサル議会担当大臣は、冬期国会が11月19日から12月22日の日程で開催される旨告知。

10月22日

- 選挙管理委員会は、ジャールカンド州の州議会選挙を11月27日から12月18日にかけて実施する旨発表。（開票日は12月23日）

10月23日

- マハラシュトラ州ターネ県で、崩落した水管橋が、下を通りかかった列車に衝突し、運転手1人が死亡、少なくとも11人が負傷。

10月24日

- チェンナイ市の警察署宛に、空港や中央駅、マリーナビーチ等でテロ攻撃を行う旨の脅迫状が殺到。

10月25日

- ヒンドゥー紙は、チダンバラム内相が、ナクサライトがミャンマーやバングラデシュ経由で武器を密輸している確かな証拠があり、また同密輸がネパール経由である可能性もあると発言した旨報道。

10月28日

- ビジネス・スタンダード紙他は、不正アクセスや迷惑メール等のサイバーセキュリティへの脅威に対する対応強化や罰則を規定した改正IT法が発効した旨報道。

10月30日

- タイムス・オブ・インド紙は、インドが、中国による国境付近の大規模な軍事インフラ建設に対抗するべく、シッキム州と西ベンガル州北部を結ぶ52.7kmに渡る鉄道建設に着手する旨報道。

10月31日

- インディアン・エクスプレス紙は、チダンバラム内相がナクサライトに対し、ナクサライトが暴力を停止すれば、中央政府は、土地取得、森林の権利等あらゆる問題について地方政府がナクサライト側と対話を行うよう説得する旨発言し、ナクサライト側は、武器を置くことは人々の関心への裏切りであるとしてチダンバラム内相の発言を拒否した旨報道。

2. 経済

10月1日

- フィナンシャル・エクスプレス紙は、インドの財政赤字が予算額の45.5%にまで拡大し、6月30日時点の対外債務も昨年同時期に比して1.5%(34億ドル)増の2,277億ドルに達した旨報道。

10月5日

- ビジネス・スタンダード紙は、第3世代携帯電話(3G)用周波数の通信事業者への提供が遅れる可能性がある旨報道。

10月6日

- ビジネス・スタンダード紙は、インド電気通信規制庁が、インドの携帯電話の料金に秒単位での課金を義務化することを計画している旨報道。
- インディアン・エクスプレス紙は、インド準備銀行が、インフレ抑制のために近く政策金利の引き上げを行うかもしれない旨報道。
- フィナンシャル・エクスプレス紙は、世銀が報告書の中で、インドの道路建設の4割がコスト超過に陥っていると指摘している旨報道。

10月8日

- アルワリヤ計画委員会副委員長は、景気刺激策や産業界への優遇措置は、GDP成長率が7%を達成するまで続けられるべきである旨発言。
- ムカジー財務大臣は、2009年度第2四半期(7~9月)の経済成長率は、第1四半期の成長率6.1%を上回らないだろうと発言。

10月10日

- ビジネス・スタンダード紙他は、インド情報放送省が、テレビチャンネルへの参入規制を強化する旨報道。

メモ：

インドでは500を超えるテレビチャンネルが既に存在し、免許を取得しているが運用を開始していないチャンネルが50-60、申請済みで政府が回答を保留しているチャンネルが約70存在。インド政府は、限られた周波数帯域を有効に活用するために参入規制を強化することを計画している。

10月11日

- シン首相は、干ばつを起因とした食糧価格上昇は最悪期を脱し、冬期作物は確実であることから状況は改善するであろうと発言。

10月12日

- ミント紙は、エアバス社が、最大のライバルであるボーイング社との製造コスト面での競争のため、2012年までに、技術及び設計部門の20%をインドを中心とした低コストの国に移管する予定である旨報道。

10月13日

- エコノミック・タイムズ紙は、電気通信規制庁が携帯電話市場の整理統合を促進するため、電気通信セクターのルールを見直す計画である旨報道。

10月14日

- エコノミック・タイムズ紙は、2009年4月～6月における対外直接投資(FDI)は前年同期と比べて18%減少の約27億ドルであったのに対し、インドへFDI流入額は32.7億ドルで前年比40.37%の増加となった旨報道。

10月15日

- ビジネス・スタンダード紙は、パテル民間航空大臣が、赤字のエア・インディアに対し500億ルピーの資金注入を計画していると述べた旨報道。
- フィナンシャル・エクスプレス紙は、インド商工会議所連盟(FICCI)が、10月27日に年間金融政策を見直す予定をしているインド準備銀行(RBI)に対し、もうしばらく緩和的金融政策を維持するよう要求した旨報道。

10月17日

- ビジネス・スタンダード紙は、タタ・テレサービス社が、地域ネットワークの拡張のために、タタドコモブランド名で展開している携帯電話サービスに10億ドルの追加投資を行う旨報道。

10月19日

- ビジネス・スタンダード紙は、ドイツのフォイト社が、タタ自動車とインドにディーゼル機関車工場を設立するための話し合いを行っている旨報道。

10月20日

- ヒンドゥスタン・タイムズ紙は、印道路交通省・国道庁が、10月31日から6ヶ月の予定で、「料金所のない道路料金徴収システム」導入のため、3区間の国道で3つの料金徴収方式(アクティブ方式、パッシブ方式、赤外線方式)の適用性を試験する予定である旨報道。

10月28日

- ビジネス・スタンダード紙は、27日にインド準備銀行が「第2四半期金融政策レビュー2009-2010年度」を発表した旨報道。

メモ：

「第2四半期金融政策レビュー2009-2010年度」では、2009年度-10年度におけるGDP成長見通しは、モンスーン降雨不足により農業生産が穏やかに減少する一方で、工業生産がより早く回復することが予想されることから、上方バイアスを伴う6%とし、また、2010年3月末までの卸売物価指数によるインフレ率は、上方バイアスを伴う6.5%と、2009年7月時点での予想5.0%を上方修正した。このインフレ期待を受け、緩和的金融政策から退出する政策の第一歩を踏み

10月29日

- 西ベンガル州政府は、ナヤチャルにおける「石油・化学・石油化学投資地域(PCPIR)」設置に関する覚書を連邦政府との間で締結。

10月31日

- エコノミック・タイムズ紙は、ジャンムー・カシミール地方におけるプリペイド携帯電話の接続が11月1日より停止される旨報道。

3. 外交

10月1日

- ヒンドゥ紙は、在インド中国大使館は、ジャンムー・カシミール州のインド旅券保持者が中国への査証を申請する際、旅券本体ではなく別紙に査証を発給する形に運用が変わった旨報道。(インド政府は、本件に関し中国側に懸念を伝達した旨発表)
- パキスタンの主要英字紙は、ギラーニ・パキスタン首相が、11月の英連邦首脳会議の機会にシン印首相と会談を行う可能性があると言明した旨報道。
- ヒンドゥ紙は、訪印中のギラード豪副首相がチェンナイで、インドがNPT(核不拡散条約)に署名しない限りウランを供給しないと発言した旨報道。
- 中国建国60周年に際し、中国が、モハンティ准将らインド陸軍兵士、政府関係者及びその家族ら200名以上を、アルナーチャル・プラデーシュ州から印中実行支配ラインを越えて中国側のブム・ラを旅券なしで入域させ、文化行事を実施。(注: 印中両国間では2002年以降両国のナショナル・デーに代表団が相手側を訪問)

10月2日

- 米ホワイトハウスは、11月24日にシン首相とオバマ大統領が首脳会談を行い、同日夜にオバマ大統領夫妻がシン首相夫妻のための公式夕食会を開催する旨発表。

10月3日

- インド外務省は、9月25日にニューヨークで開催されたイスラム諸国会議機構(OIC)が、バクル OIC 事務次長をカシミール問題担当特使に任命したことに対し、OIC がインドの内政問題にコメントしたことは遺憾であり、これを非難するとともに拒否する旨の声明を発表。
- インディアン・エクスプレス紙は、カブールへの電力供給のための4年にわたる202Kmの送電線建設作業を完成させた旨報道。
- ベトナムの主要各紙は、グエン・ティ・ヅアン・ベトナム国家副首相が9月30日から6日間に渡り、50名を超えるビジネス関係者とともにインドを公式訪問している旨報道。

10月4日

- バーレーンを訪問中のタルール・インド外務担当閣外相は、ハーリド外相と会談。

10月5日

- 英字各紙は、インド海軍と沿岸警備隊は、ケララ州沖の領海に許可なく侵入したとして北朝鮮鮮貨物船「Hyang Ro」(排水量9,000トン)を2日に拿捕するも、違法性のある積荷や証拠を発見できなかったとして4日に同貨物船を解放した旨報道。

10月7日

- ヒンドゥー紙は、6日より3日間の予定で、インドとスリランカの海軍合同演習が開始された旨報道。

10月8日

- アフガニスタンの首都カブールにあるインド大使館付近で自爆テロが発生し、インド大使館関係者を含む多数が負傷。
- タイムス・オブ・インディア紙は、12日から15日間の日程で、ウッタル・プラデーシュ州において、印米間の陸上共同軌道訓練が実施される旨報道。

メモ:

報道によれば、今回の印米共同訓練は、準都市部におけるカウンター・テロ等を対象とした機械化歩兵部隊の訓練及び印米間の相互運用性の向上を目的とし、これまでの最大規模の共同訓練となる由。

10月9日

- インディアン・エクスプレス紙は、印米2カ国間投資協定が締結への最終段階にある旨報道。

10月13日

- クリシュナ印外相は、訪印中のスミス豪外相と第6回印豪外相枠組対話を行い、対話後共同声明を発出。

10月14日

- キルチネル・アルゼンチン大統領が、両国の国交樹立60周年の機会に国賓として13日～15日の日程で訪印。14日に共同声明を発出し、原子力の平和利用分野における開発、促進及び協力を行う考えを改めて表明。

10月16日

- アントニー印国防大臣はロシアを訪問し、「軍事技術協力に関する印露政府間委員会」第9回会合に参加。
- ブラウン英首相は、ヒンドゥー教の秋の大祭であるディワリ祭を祝うメッセージを発出。

10月19日

- 印国防省は、19日から23日間の日程で、ウッタル・プラデーシュ州のアグラ空軍基地において、印米空軍間の共同訓練を実施する旨発表。

メモ：

印米空軍間共同訓練は2003年以来6度目。今回の訓練では、国内の治安維持作戦の手順を確認し、空挺急襲作戦及び暗視ゴーグルを使用した戦術作戦等において、印米両国がお互いの部隊運用を訓練することも含まれる。

- ヒンドゥー紙は、スリランカのタミル人の社会復帰のため、インドがスリランカに新たに50億ルピーを供与する旨報道。

10月20日

- クリシュナ印外相が、20日～22日にかけてロシアを訪問。ソビヤニン露副首相とともに「経済・貿易・科学技術・文化協力委員会」第15回会合の議長を務める。
- フィナンシャル・エクスプレス紙は、インドとインドネシアの官民で構成された合同委員会が二国間の貿易協定を提案した旨報道。
- 印外務省は、21日から25日にかけて、ナシード・モルディブ大統領が訪印する旨発表。

10月21日

- タルール印閣外相(外務担当)は、21日～23日の日程でベナンを訪問。エウズ外相と共同で「政治・経済・貿易・科学技術・文化協力委員会」の議長を務める。
- インド森林環境省は、ラメシュ環境森林大臣と解振華・中国国家発展改革委員会副主任との間で気候変動に関する協力のための覚書に署名した旨発表。

メモ：

印中両国は、印中気候変動取組パートナーシップ設立に合意したほか、気候変動に関する国際交渉や国内政策・措置、協力事業の実施に関する重要事項につき意見交換を行う気候変動作業部会の設立に合意し。また、印中両国は、温室効果ガス削減に関する緩和政策、計画、事業、技術開発等に意見交換と協力を強化することに合意。

- インディアン・エクスプレス紙は、19日より約2週間の日程で、インド陸軍がモルディブ国防軍に対し特殊部隊訓練を行い、同種の訓練は今後定期化される旨報道。

10月22日

- クリシュナ印外相はウズベキスタンを訪問。(～23日)

10月24日

- 東アジア首脳会議(EAS)出席のためタイを訪問中のシン首相と温家宝首相が印中首脳会談を実施し、両国間の戦略協力パートナーシップ関係の推進を堅持することで一致。

10月27日

- バンガロールにて印中露外相会談が実施され、会談後共同コミュニケを発出。

メモ：

共同コミュニケによれば、3カ国外相は災害対策やビジネス界の交流の状況につきレビューを行った他、農業協力に関する専門家会合の開催を歓迎。次回会合は2010年に中国で開催される予定。

- カトマンズにおいて、シャルマ印商工大臣とマハト・ネパール商業供給大臣との間で、ネパール・インド貿易協定の改定及び非公式貿易の統制に向けた協力に関する合意に署名。

10月28日

- カナダ首相府は、ハーパー・カナダ首相が11月16日から18日にかけてインドを訪問する旨発表。
- イギリスを訪問中のパティル印大統領がブラウン首相と会談。

10月29日

- 英字各紙は、アントニー国防大臣が、インドは将来においてもアフガニスタンに対し軍の派遣による軍事的な関与をする考えは一切なく、人道支援及び復興支援に徹すると述べた旨報道。

10月30日

- 英字各紙は、スリナガル訪問中のシン首相が、「パキスタン政府がテロリストに対して実効的な措置を取ることが対話再開の前提条件ではないが、実質的な対話前進のための条件である」と発言した旨報道。

4. 日印関係

10月19日

- 訪印中の小沢環境大臣がラメシュ環境森林大臣と会談。
- ナラヤナン国家安全保障顧問が首相特使として来日し、鳩山総理、平野官房長官、岡田外務大臣を表敬訪問。

10月22日

- 神戸製鋼グループ企業であるコベルコ建設機械の100%子会社であるコベルコ・インディア(KCEI)は、アーンドラ・プラデーシュ州スリ・シティーに油圧ショベル製造工場を設立する目的でスリ・シティーとの覚書に署名。

10月23日

- 三菱化学を中心とする合弁企業 MCC PTA India Corporation Pvt Ltd (MCPI) のハルディア第2工場の竣工式が実施される。

10月24日

- 鳩山総理はタイでのASEAN関連首脳会議の機会にシン首相と会談。

10月27日

- 堂道駐インド日本大使とクリシュナ印財務省経済局長は、貨物専用鉄道建設計画(西回廊)第1フェーズのエンジニアリング・サービス借款にかかる交換公文に署名。

今月の注目点：「インドの気候変動問題への対応」

気候変動枠組条約第15回締約国会議(COP15)の開催が12月に迫っている。主要排出途上国の1つであるインドは、従来より、気候変動問題に対する先進国の歴史的責任・削減義務を強調し、排出量が世界全体の約4%に過ぎないインドが国際的な法的拘束力のある排出削減目標は受入れられないとの立場をとってきた。19日にタイムズ・オブ・インディア紙が、ラメシュ環境大臣がシン首相に送った書簡の内容を報じ、その中でラメシュ大臣は、途上国131カ国が加盟するG77からインドを切り離し、温室効果ガス削減にコミットすることをシン首相に提案したとされているが、翌20日にラメシュ大臣は、気候変動問題に対するインドの立場は従来と変更がないことを確認する声明を発出している。他方、インドは、昨年6月に気候変動に関する国家行動計画を発表した他、本年10月には、気候変動問題に関する「技術開発及び技術移転に関するデリー・ハイレベル会合」を開催するなど、本件に対する独自の取り組みを行っており、今後の気候変動問題に対するインドの対応が注目される。

4. イベント紹介 Japan-India Events

◇『詩画集出版記念シーター・ロイ遺作展——日印文化融合のマイルストーン』開催式にて

10月30日金曜日、インド大使館広報センターにおいて、故シーター・ロイさんの遺作展開催式が行われました。式にはシン駐日インド大使夫妻、バッタチャリア公使、ジョティルモイ・ロイさん（故シーター・ロイさんの夫）のほか奈良毅東京外国語大学名誉教授夫妻、日本画家の山田真巳画伯、坂田貞二拓殖大学名誉教授、などが出席されました。

奈良先生は今回の遺作展の実現のため、日印関係者が集まった組織委員会の先頭に立って奔走され、シーターさんの詩画集のベンガル語を翻訳されています。

当協会からは、所用で出席できなかった平林理事長にかわり原常務理事と青山事務局長が出席し、ロイ夫妻が長年当協会の会員として日印交流に尽くされたことに謝意を表し、遺作展開催を祝うメッセージを披露しました。

広報センターのギャラリーには約50点の遺作が展示され、シン大使夫妻は、ジョティルモイさんの丁寧な説明に、感慨深げに聴き入っていました。また広報センター講堂では、ロイさんの絵画に詩の朗読を合わせて収録したDVDが上映されました。いずれも、日本をこよなく愛したロイさんの気持ちが伝わる素晴らしいものです。

詩画集とDVDはジョティルモイさんがご寄贈下さいましたので、協会事務局でご覧頂けます。



〈左から
シン大使夫人 シン大使 奈良名誉教授 ジョティルモイ氏〉



〈詩画集
『日本国における我が家にて』〉

◇東京ディワリフェスタ西葛西

“ディワリ”ってなんのこと？ “灯り”とか“光”の“列”という意味です。サンスクリット語で、“ディバ”（光・灯り）+“ワリ”（列・行列）の2語から成り立つ“光の祭典”のことで、10月下旬から11月上旬頃の新月の夜に行われます。収穫の時期にもあたり、富と幸運の女神ラクシュミや富と繁栄の神ガネーシャに対してプージャ（祈り）を行います。灯りをとすのは、神様が道に迷わないためです。神様を敬うインド人の優しさが伝わってきますね。

さて10月31日土曜日、秋晴れの下『第10回東京ディワリフェスタ西葛西』が、江戸川区新田6号公園で開催されました。代々木公園で毎年開かれているナマステ・インディアに比べ規模は小さいのですが、集まった人たちは付近の住民がほとんどで、地域密着型、家族的雰囲気漂うとても良い催しでした。

主催者代表のチャンドラニさん（当協会会員・6頁以降に記事掲載）は、10回目を迎えた“ディワリフェスタ西葛西”について、「10年前、江戸川区西葛西界隈のインド人コミュニティーの中で、外交官出身で指導的立場にあった Daulatram Hotani 氏（故人）が、インド人は自国の文化や伝統を守るだけでなく、日本の地域住民と交流して日本人社会にも同化しなければならないと主張して始まったのが“ディワリフェスタ西葛西”です。当時、数十名のインド人が初めてボランティアとして参加しましたが、その後毎年開催され、8回目までは区民会館で開かれていました。しかし、参加人数が増えて区民会館に収容しきれなくなったので、区の斡旋で、9回目から新田6号公園で開催されるようになりました。Hotani 氏の遺志を継いで、これからも毎年開催していきます」と、語りました。

<開催予定>

◆インドを語る集い<様々なインド>第23回開催のお知らせ

12月9日水曜日、協会事務所にて<様々なインド>『音文化による日印交流の展望』を開催致します。

講師：T M Hoffman 日印音楽交流会代表(当協会個人会員)

日時：12月9日 水曜日 18:00～19:30

場所：日印協会事務所

参加費：当協会会員無料(非会員 500円)

参加申込用紙を同封致しましたので、皆様お誘い合わせの上ご参加下さい。

◆社団法人日本詩人クラブ 60周年オープニング・イベント——国際交流 2009

2010年に創立60周年を迎える(社)日本詩人クラブが、2009年12月から2010年12月までを記念年として様々な行事を催します。12月にはインド国立アカデミー会長のシュニル・ゴンゴパツダエ氏を迎えて、「国際交流のつどい」を行います。

日時：12月12日 土曜日 14:00～

場所：シーサイドホテル芝弥生 2F「あかつき」 〒105-0022 東京都港区海岸 1-10-27

詳細：<http://homepage3.nifty.com/japan-poets-club/event/event.htm>

<お知らせ>

*ランガナタンさんがAOTS(財団法人海外技術者研修協会)50周年記念大会で大賞受賞

AOTSチェンナイ同窓会の発起人でもあるMulvadi Raghupathy Ranganathan氏/Nihon Technology Private Ltd 会長)は、この度AOTS創立50周年シンポジウムで同氏の長年に亘る「日印交流活動」が高く評価され、文化交流部門での大賞が授与されました。

同氏の貢献に対し2005年に旭日双光章が授章されていますが、チェンナイにおける日本語学校への支援を始め、日印協会関係者ではエミ・マユリーさんや、石見神楽の上演、江戸職人の匠の技の紹介等々で大変お世話になっています。

【訃報】

ナレシ・マントリ師

本年9月17日、ムンバイで逝去されました。享年80歳。

師は1963年来日、以来46年間日本に滞在し、「サルボダヤ日印文化センター」の設立や社団法人「サルボダヤ交友会」副会長として、人生の大半をサルボダヤ運動に投じられました。

また、日印協会の関係者とも親交を深められ、協会主催の講演などにもご協力下さいました。

日印交流に尽くされたマントリ師のご冥福をお祈り申し上げます。

5. 新刊書紹介 Book review

§ 『Magazine X Business～マガジンXビジネス』 Vol.001



発行：2009年12月14日（書店発売は10月31日）

発行所：株式会社三栄書房

定価：780円

雑誌『マガジン X』と聞いてもご存知ない方が多いと思いますが、三栄書房発行のマニア向け自動車雑誌で、今回は「タタのすべて」という特集を組み『Magazine X Business』として発売中です。

編集人の手束毅氏が初めてインドに行き、発売されたばかりのナノを軸にインドの自動車事情を紹介。更にムンバイのスラム、ダラヴィを突撃取材しています。ユニークかつ自然目線で、今までに無いインドルポとなっています。

〈本の紹介〉

📖 Vikas Swarup *SIX SUSPECTS* (Transworld Publishers, UK, 2008 英語版のみ)

アカデミー賞最多の8部門受賞作品「スラムドッグ・ミリオネア」の原作となった *Q & A* (邦訳名『ぼくと1ルピーの神様』講談社、2009)の著者による2作目の作品で、実に面白い。

非常に多くの人物が登場し、非常に多くの事件がおこるため、容疑者と殺人事件との接点が多くなかなかめず、最後まで誰が真犯人なのか分からない。意外な結末で、見事は娯楽作品である。

著者のヴィカース・スワループ氏は大阪・神戸インド総領事として8月に着任され、公務につかわれている。筆者はすでに数回お会いしているが、なにごともしばきと素早くこなす、そつのない外交官という印象をもった。メディアにつねに小説のことをまず訊かれるので、「私はまず外交官であり、外交官としての仕事を忠実に果たすのが私の第一の使命で、小説を書くのは私の趣味です」とこれまた、そつなく述べられたのが印象的だった。

これだけの長編小説を南アフリカでの勤務中に、週末と休暇を利用して書き上げたというから、すごいエネルギーの持ち主である。第3作にはどんな構想をもっておられるのか楽しみである。

溝上 富夫(ミゾカミ・トミオ)氏からの寄稿(一部抜粋)

大阪外国語大学名誉教授 関西日印文化協会会長 当協会個人会員

📖 「走り出した巨像——主要国入りしたインドの現状と課題——」



平林博理事長による記事が、『インテリジェンス・レポート』第14号の「特集：BRICs—二十一世紀の主役になるか」の一環として掲載されています。

ここ数年来躍進を続けるインドではありますが、順調に歩を進めてきたわけではありません。独立後の政治・経済・外交の面から世界の主要国に仲間入りを果たした現在に至る軌跡が記され、また「世界最大の民主主義国」と言われながらも残存する階層差別にも触れています。親日国家としての日本との関わりなど、日印関係の全体像を理解するのにもうってつけの内容となっています。

是非ご一読下さい。

購読に関しては、下記にお問い合わせ下さい。

発行：平成21年11月11日

発行所：株式会社インテリジェンス・クリエイト

〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町2-22

TEL 03-5833-2261(代)

URL <http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~I-Create/> (jp/の後ろの~はチルダ)

定価：830円

6. 掲示板 Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回の発送は12月11日(金)を予定しております。

会員の皆様のお手元に届くのは14日月曜日以降になると思います。12月14日以降に予定されているインド関連の催事のチラシなどを会報に封入しませんか？ 封入作業は、お互いに情報交換しながら和やかな雰囲気で行われます。ご希望される方は、事務局までご連絡下さい。

〈皆様のご意見歓迎致します！〉

『月刊インド』、『現代インド・フォーラム』やホームページなど、内容を充実していくために、会員の皆様のご意見・ご感想を是非お寄せ下さい。

ホームページには、皆様の提言を投稿して頂けるコラムがございます。日印関係を更に良くするためにお知恵をお貸し下さい。皆様からのご投稿による“談論風発”を期待しております。

〈編集後記〉

これからは、在日インド人の中で日印関係に貢献した苦労話・裏話を、不定期ではありますが掲載します。今号では、東京都の西葛西インド人コミュニティの発展に貢献されたチャンドラニ氏のお話を紹介致しました。日印協会をインド人コミュニティにも広げる目的もあります。ニュアンスを損なうことが無い様、原文のまま掲載しております。

11月3日に叙勲者が発表されました。4,024名うち、在外・在日外国人61名の方が受章されています。インドの方も旭日大綬章・旭日中綬章・瑞宝双光章を各1名、計3名の方が受章されました。また、当協会を支援くださる方々にも受章された方がいらっしゃいます。

心よりお祝い申し上げます。



日印親善のために会員の輪を広げましょう



法人会員・個人会員の入会をお待ちします

1903年、大隈重信、澁澤榮一らによって創設された財団法人日印協会は、これまで日印の相互理解と両国の親善増進のために、日々地道な努力を続けてまいりました。ここ数年来の日印の良好な関係がより一層深まるためにも、会員の獲得は重要な課題であると考えています。インドに興味のあるお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。

ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。

日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費：個人	6,000 円/口	☆入会金：個人	2,000 円
学生	3,000 円/口	学生	1,000 円
一般法人会員	100,000 円/口	法人	5,000 円
維持法人会員	150,000 円/口	(一般法人、維持法人会員共に)	

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド Vol.106 No.9 (2009年11月13日発行) 発行者 平林博 編集者 青山 鑛一
発行所 財団法人日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: <http://www.japan-india.com/>

